

巴里のむす子へ

岡本かの子

青空文庫

パリの北の停車場でおまえと訣れてから、もう六年目になる。

人は久しい歲月という。だが、私には永いのだか短いのだか判らない。あまりに日夜思い続ける私とおまえとの間には最早や直通の心の橋が出来ていて、歲月も距離も殆ど影響しないように感ぜられる。私たち二人は望みの時、その橋の上で出会うことが出来る。おまえはいつでも二十の青年のむす子で、私はいつでも稚純な母。「だらしが無いな、羽織の襟が曲ってるよ、おかあさん、」

「生意氣いうよ、こどもの癖に、」二人は微笑して眺め合う。永劫いこうの時間と空間は、その橋の下の風のように幽かすかに音を立てて吹き過ぎる。

二人の想いは宗教の神秘性にまで昂め^{たか}られている。恐らく生を更^かえ死を更えても変るまい。だが、ふとしたことから、私は現実のおまえに気付かせられることがある。すると無^{むやみ}暗に現実のおまえに会い度くなる。巴里が東京でないのが腹立たしくなる。

それはどういうときだというと、おまえに肖^にた青年の後姿を見たとき、おまえの家へ残して行った稽古用品や着古した着物が取出されるとき。それから、思いがけなく、まるで違ったものからでもおまえを連想させられる。ぼんの窪^{くぼ}のちぢりつ毛や、の太^{ぶと}い率直な声音、——これ等も打撃だ。こういうとき、私は強い衝動に駆られて、若^もし許さるるなら私は大声挙げて「タロー！ タロー！」と野でも山でも叫び廻り度い気がする。それが出来ないば

かりに、私は涙ぐんで蹲うずくまりながらおまえの歌を詠よむ。おまえがときどき「あんまり断片的の感想で、さっぱり判りませんね。もつと冷静に書いて寄越して下さい」と苦り切った手紙を寄越さなければならぬほどの感情にあふれた走り書を私が郵送するのも多くそういうときである。だが、おまえが何といおうとも、私はこれからもおまえにああいう手紙を書き送る。何故ならば、それを止めることは私にとって生理的にも悪い。

おまえは、健康で、着々、画業を進しんちよく捗とくしていることは、そつちからの新聞雑誌で見るばかりでなく、この間来たクルト・セリグマン氏の口からも、または横光利一さんの旅行文、読売の巴里特派員松尾邦之助氏の日本の美術雑誌通信でも親しく見聞きし

て嬉しい。健気けんげなむす子よと言ひ送り度い。年少で親を離れ異国の都で、よくも路を尋ね、向きを探つて正しくも辿たどり行くものがある。辛いつらこともあつたらう。辱はずかしめも忍ばねばならなかつたらう。一たい、おまえは私に似て情熱家肌の純情屋さんなのに、よくも、そこを矯ため堪えて、現実に生きる歩調に性情を鍛え直そうとした。

「おかあさん、感情家だけではいけませんよ。生きるという事実の上に根を置いて、冷酷なほどに思索の歩みを進めて下さい」

お前は最近の手紙にこう書いた。私はおまえのいうことを素直に受容れる。だが、この言葉はまた、おまえ自身、頑かたくなな現実の壁に行き当つて、さまざまに苦しみ抜いた果ての体験から来る自戒

の言葉ではあるまいか。とすれば、おまえの血と汗の籠った言葉だ。言葉は普通でも内容には沸々ふっふっと熱いものが沸いまっている。戒いましめとして永く大事にこの言葉の意味の自戒を保ち合つて行こう。

私たちがおまえを巴里へ残して来たことは、おまえの父の青年画学生時代の理想を子のおまえに依つて実現さすことであり、また、巴里は絵画の本場の道場だからである。しかし、無理をして勉強せよとも、是非偉くなれとも私たちは決して言わなかった。

ただ分相応にその道に精進すべきは人間の職分として当然のことである。ただだけは言った。だのに、おまえはその本場の巴里で新画壇たがの世界的な作家達と並んで今や一かどのことをやり出した。勿も体たいない、私のような者の子によくもそんな男の子が……と言え

ば「あなたの肉体ではない、あなたの徹した母性愛が生んだので
す」と人々もお前も、なおなお勿体ないことを言つて呉れる。

私たちの一家は、親子三人芸術に關係している。都合のいいこ
ともあれば都合の悪いこともある。しかし今更このことを喜憂し
ても始まらない。本能的なものが運命をそう招いたと思うより仕
方がない。だが、すでにこの道に入った以上、左顧右眄すべきで
はない。殉ずることこそ、発見の手段である。親も子もやること
ろまでやりましょう。芸術の道は、入るほど深く、また、ますま
す難かしい。だが殉ずるところに刻々の発見がある。本格の芸術
の使命は実に「生」を学び、「人間」を開頭して、新しき「いの
ち」を創造するところに在る。斯かかるときに於てはじめて芸術は人

類に必需で、自他共に恵沢を与えられる仁術となる。一時の人気や枝葉の美に戸惑つてはいけない。いつそやるなら、ここまで踏み入ることです。おまえは、うちの家族のことを芸術の挺身隊と言つたが、今こそ首肯する。

私は、巴里から帰つて来ておまえのことを話して呉れる人毎に必ず訊く、

「タローは、少しは大きくなりましたか」
すると、みんな答えて呉れる。

「どうして、立派な一人前の方です」
ほんとうにそうか、ほんとうにそうなのか。

私が訊いたのは何も背丈けのことばかりではない。西洋人に伍

して角かくちく 逐出来る体力や気魄つひに就て探りを入れたのである。

「むすこは巴里の花形画家で、おやじや野原のへぼ絵描き……」

こんな鼻唄をうたいながら、お父様はこの頃、何を思ったかおまえの美術学校時代の壊れた絵の具箱を肩に担いでときどき晴れた野原へ写生に出かける。黙ってはいられるが、おまえの懐かしさに堪えられないからであろう。

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集12」ちくま文庫、筑摩書房

1994（平成6）年7月21日第1刷発行

底本の親本：「池に向いて」古今書院

1940（昭和15）年11月5日

初出：「新女苑」

1937（昭和12）年4月号

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2018年12月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

巴里のむす子へ

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>